

# 『テアイテトス』の「脱線議論」 (172C-177C) の意義と内容について

渡 辺 邦 夫

## Abstract

The so-called ‘Digression’ in Plato’s *Theaetetus* was traditionally treated as a convenient and very thought-provoking summary of Platonism. But its significance was once almost totally ignored in some interpretations in the 20<sup>th</sup> century. In this paper I interpret the part of Digression precisely in its immediate context and hope to show that it plays an important role in the criticism of Protagoreanism which is the main theme of the first part of the dialogue. The key to understand the role lies in the recognition that the Protagorean position had to claim both the validity of the relativist theory of truth on one hand and the *sui generis* and absolute wisdom of the sophists on the other. The Digression is a preparation for attacking one version of the latter claim, which declares its monopolizing ability to change the appearances of all people concerning what is advantageous, as an arrogant megalomania from the perspective of the leaders of science and philosophy. It makes a crucial turning point in the course of the arguments against

Protagoras, which continue both in the subsequent parts of the *Theaetetus* and in the whole *Sophist*.

## Keywords

Platonism, the *Theaetetus*, relativism, Protagoras, God-likeness, moral values, prudence

『テアイテトス』は西洋哲学における知識論の古典であり、抽象度が高く分析的な議論が次々と繰り出される本格的理論哲学の書として著名である。プロの哲学者たちはこの著作によって認識論や心の哲学の哲学的難問と、その解決のための頭の訓練を受けた。アリストテレスが『テアイテトス』の熱心な読書ぬきに『形而上学』I巻や『デ・アニマ』や『分析論後書』を執筆できたとは思えないし、近世のライブニッツにとつても、『テアイテトス』との出会いは決定的であつたといわれる。現代のウィトゲンシュタインが『哲学探究』において『テアイテトス』の「ソクラテスの夢」をひとつの考

察対象としていることもまた、周知のエピソードであろう。

このようなエピソードは、『テアイテトス』がまさに玄人、それも哲学の世界で一流の玄人向けの著作であり、超弩級の難解さを持った著作であることを示唆する。しかしこの作品は、ちょうど真ん中あたりに、明らかにそれほど難解でない一定分量の「脱線」をも持っている。172C-177Cのこの部分の議論は、内容的に知識と何らかという主題と一見離れているし、難易度においてもまわりの分析的議論よりも受け入れやすい平易さを持っているようにみえる。そして何より、プラトンは「脱線議論」の最後に、哲学を専門としない対話者テオドロスに「いや、わたしにしてみれば、このようなことは、ソクラテス、むしろ聞くのが楽なことなのです。なぜならこの年齢の身にすれば、こういったことのほうが、話についていきやすいものですから」(177C)のように語らせている<sup>①</sup>。議論の中身は哲学的な真理探究の生と、争いごとの中で立身をはかるために身の危険にさらされることも多く、不正に手を染め、よいと思われ、ことや正しいと思われ、ことでよしとする政治的・弁論家的生との対比である。初期からのプラトン対話篇の読者ならば何回か目にした議論内容であり、プラトンはそれをここでは、非常にコンパクトに、印象的に語っている。メッセージは不正と悪のない神にできるだけ似ようとしなければならず、そうしなければ生きている間の裁きとして悪人たちの間で生きてゆくことになり、死後の裁きとして浄められた場所に行けなくなるというものである。

伝統的には、「脱線議論」は「神の似像の議論」という内容的名

称とともに、プラトニズムの便利で高級な梗概のように扱われて、高い地位を保ってきた。古代にかぎっても、アリストテレスと新プラトン派と初期キリスト教プラトニスト思想家が共有する、プラトニズム第一教本ともいえるステータスがあったと思われる。しかし『テアイテトス』の議論の魅力を非常に高く評価し、研究の質の向上にも貢献した二〇世紀後半のジョン・マクダウェルのこの議論の扱いは、劇的に冷淡なものに変わった。本文としての前後の議論への単なる「脚注」のようなものにすぎないというかれの評言が、この態度を率直に言い表している。

これに対して、たとえばデイヴィッド・セドレーは伝統的な位置づけの回復をかれ独自の解釈仮説の実行という形で果たそうとした。セドレーの『テアイテトス』理解はソクラテスの産婆術によってプラトンの哲学を生むという趣向でこの対話篇が書かれたというものであり<sup>②</sup>、かれが『国家』などの内容と通じる「脱線議論」の再評価を試みることも、この方針からは自然である(先ほどのマクダウェルは「プラトン哲学の発展主義的解釈」の支持者であり、『テアイテトス』は中期のイデア論の世界から大きく踏み出して先に出てゆく内容を持つと考えている)。セドレーは、「脱線議論」の敬虔の扱いが、敬虔の徳が初期の五つの枢要徳には入っていたのが、『国家』第四巻のいわゆる四元の枢要徳の正義、節制、勇氣、知恵の中に入らなくなったことをさらに継ぐ、まったく新しい議論と考えている。すなわち、『テアイテトス』の「脱線議論」が、ギリシアの伝統的宗教意識としての「敬虔の徳」、つまりローカルな宗教儀礼

の遵守ということを大きく踏み越えた、普遍的で主知主義的な敬虔理解を説くものであるとして、独自の解釈を立てている<sup>(4)</sup>。このような「敬虔」の重視は引き継ぎつつ、ギリシアの宗教儀礼との調和に配慮して、敬虔を正義の一種とみなす『国家』の態度との一貫性をも守ろうとする、セドレー解釈の批判的継承に、マックフェランの綿密な研究がある<sup>(5)</sup>。

両者の中間をゆく第三の解釈態度も存在する。たとえば、マクダウェルの注釈と並んで一九七〇年代に『テアイテトス』解釈の状況を一新したマイルズ・バーニエトは、脱線議論はこれ以外の箇所の議論が「議論」であるのに対して「レトリック」であるという見解であり<sup>(6)</sup>、セドレー、マックフェランほどの積極的情熱はないが、マクダウェルの事實的な無視よりは積極的な態度を示している。バーニエトの理解によれば、「脱線議論」は直前の71Dからの文脈で読まれるべきであり、そこではオリジナルのプロタゴラス説である相對主義を、「有益さ」に関するプロタゴラスの絶対的知恵の保持という観点から修正することがもくろまれている。したがって、価値に関する相對主義としてのこの修正提案にまつわる、だれでも考えなければならぬ問題が「脱線議論」の形で取り組まれた——このようにバーニエトは解釈する。この議論の中心テーマは、このような必要性に応じて正義と知（ないし思慮深さ *prudence, phronēsis*）であり、(71D)に始まるプロタゴラスの価値相對主義の立場のように「もし有益性の諸問題が客観的な答を持ちながら、何が正しいかが不正かという問題が、共同体や個人のそのつど変動する判断

に依存し、そうした判断に相対的であるのなら、正義がひとの最善の利害のうちにあると語ることが不可能になる」。そして、こうして結局、幸福に正義は必要かという問いは宙に浮くことになり、正義と思慮深さのあいだの分裂によって『国家』執筆の構想が崩れる結果になるという<sup>(7)</sup>。

——本稿では、これらの解釈のそれぞれの成果を見据えた上で、直前と直後の議論から「脱線」の議論の導入意図を探るという形で解釈を始めたい。そして、まさにこの議論が置かれた文脈的位置の特殊性から、この議論に「脱線」という特徴が備わったという、一種の逆説的事態があつたことを推測する。結果は、評価のトーンとしては、バーニエトの示した「中道」よりは、さらにやや積極的な評価というあたりに落ち着く。しかし、以下の解釈が正しければ、じつは重要なのは、そのような積極評価・消極評価の微妙な色合いではない。私見ではプロタゴラス説論評の71D周辺の新展開はバーニエトが見たよりもはるかに重大な、相對主義に對峙しようとする者の一般的で根本的で先行的な態度決定の問題を含んでおり、これに呼応して「脱線議論」には、その問題性においてまったく新しい種類の価値がある。これの新しい形式の評価をわれわれ読者が試みることそのことに、すでに著者プラトンの深慮遠謀が隠されているとわたしは考える。

以下、第一節でまず、直前直後の議論のメッセージと、その議論が要求する「その間」の議論の特質を考えてみることにする。

## 一 「脱線議論」直前と直後の議論から、

## 脱線することの意義を予想する

脱線の議論は『テアイテトス』第一部の議論がだいぶ進んだ時点でソクラテスによって語られる。これを取り巻く文脈で第一に重要だと思われるのは、これに直接先行する議論とこれの直接の後続の議論である。

(A) 直接前のごく短い議論 (171D-172B) は、プロタゴラスの相対主義の議論の重大な転回点を読者に示すものである。対話者ソクラテスはそのにおいて、プロタゴラスの相対主義の趣旨を理解するために、真理の相対性の成立、不成立という観点から、二種類の述語を区別するという提案をおこなう。

## (1) 相対的真理成立の述語群

(a) 各人にとつての「温い」「乾いた」「甘い」など

(b) 各国にとつての「美しい」「醜惡な」「正しい」「不正な」「敬虔な」「不敬虔な」など

## (2) 絶対的真理成立の少数述語

(c) 各人にとつての「健康な」「病的な」

(d) 各人各国にとつての「有益な」「有益でない」

なぜ脱線をしてまで、プラトンが自分の一般的教説を参照しなければ

ばならなかったのかという事情を説明する第一の手掛かりは、私見では、この箇所での「有益である (172A5,6, B1 *sumponon*, A7 *sumbolon*)」という述語<sup>9</sup>が、例外的な絶対的真理の領域に属するという重要な役割を担って登場するところにある。ソフィスト、つまり前五世紀の自称知恵のある「徳の教師」であるプロタゴラスは、この箇所の相対的述語への例外的設定において、高い授業料をとる職業的教師としての自分の、特段の社会的メリットを説く権利を確保されなければならない。

この点は、すでに作品としての『テアイテトス』の戯曲的な展開の中で、予告的に示されてもいた。ソクラテスが若者テアイテトス相手にやや自由な角度からプロタゴラスの立場を批評したことに、プロタゴラスは抗議してくるだろうとソクラテスは自分で言ったのち、そうした想像上の抗議をプロタゴラスが述べたらこうなるだろう、というふうに「演説」を再現してみせる、そのなかでかれは、次のようにプロタゴラスに言わせている。

・・・そして、知恵と知恵のある者が存在しない、とわたしは主張するなどということは、とんでもないことである。わたしは実際に、われわれのだれかに何かが悪くあらわれ、悪くあるとき、そのものに変化を及ぼして、よくあらわれ、よくある<sup>9</sup>という結果を生むような、そのような人であれば、これを「知恵ある人」と言うのである。しかし、この場合にも、わたしのことを字面で追わず、このようにして、さらにより明確にわた

しの言っている意味を学びなさい。すなわち、以前に語られた類いのことだが、病気で弱っている者にとつて、かれが食べるものは苦くあらわれ、そして苦くあるが、健康なものにとつてはそれと反対であり、かつ、反対にあらわれるということを思い出してほしい。むろん、これらの者のいずれかをより知恵がある者となす、などということをするべきなのではない。なぜならそんなことは、そもそも可能でさえないのである。また、病気の者がこの種のことを判断しているがゆえに無知であり、健康な者がそれと別種のことを判断しているがゆえに知恵がある、と主張すべきでもない。そうではなく、これらのうちの方へと、変化を起こさなければならぬのである。というのも、その片方の状態のほうがよりよいからである。そしてこのようにまた、教育においても一方の状態からよりよい状態へと、変化させなければならぬ。ただし、医者の方は薬によつて変化を起こし、ソフィストの方はことばによつて変化を起こすのである。(166D-167A)

この架空の「演説」のメッセージは明らかであろう。プロタゴラスの真理に関する相対主義のテーゼとして知られるものは、『テアイテトス』にあるプラトンの記述が古典的典拠であり、

万物の尺度は人間である、有るものには有ることの、ありもしないものにはありもしないこと。(152A)

『テアイテトス』の「脱線議論」(172C-177C)の意義と内容について

というものであるが、プラトンはソクラテスに、これの典型的解釈をまず与えさせる。すなわち、おなじ風が吹いて、一方の人が「寒い」と(誠実に)主張し、他方の人が(誠実に)「寒くない」と主張する場合の「相反するあらわれ」と呼ばれる事態である(152B-C)。)のような場合に両者の判断の食い違いを解決してくれる「客観的で絶対的な真理」としての「風は寒いことが真だ」「風は寒くないことが真だ」はナンセンスで、「風は寒い」は知覚者Xにとつて真、「風は寒くない」は知覚者Yにとつて真、のように言わなければならない、この場合の「・・・にとつて真」はそれ以上「・・・にとつて」と「真」には分解されないような、基底的な相対的真理の表現であるとされる。

この事態が、この「寒い」という述語にこの事例で成立しているかどうかは、むろん討議可能な問題である。わたし自身は、ここでさえ「相対的」真理を語ることができないように思っている<sup>⑩</sup>。しかし今は、そこは措き、このような相対的真理を導く議論は「寒い」だけでなく他の事例の他の述語にも適用可能かどうか、極端にはすべての事例のすべての述語についておなじことが成り立つとまで言わなければならないのかどうかというこのほうを問題にしよう。実際、『テアイテトス』第一部の議論もまたそのように滑り出して、全面的相対主義が成り立つかどうかを検討するものであった。「演説」においてプロタゴラスは、ほぼ全面的に、相対主義は成り立つが、「よい」という述語は例外なのだと言っている。ここに、



かれを代表とするソフィストが持つ、へ人々のあらわれを変える力」の絶対的意義をかれは見いだすからである。

cは、医者「知恵」の絶対的優勢を押さえる。健康であるか否かは素人と玄人の見識に大きな差が発生する領域の問題であると、ソクラテスはプロタゴラスの立場のために論じる。ソクラテスはこの受け入れられやすい主張に立脚して、プロタゴラスの専門知の自称を、dという分類によって論じようとする。健康であるかどうかは医者が特権的に分かっている領域だが、これとまったくおなじように、ソフィストも有益であるか否かについて、ほかの「素人」が及ばないような専門の知恵を持ち、この点での凡人や国の為政者のあらわれを変えてゆく特権的な資格を持っているとかれは論じるのである。

このようにして、a―dで並べられる述語の四分類において、「有益さ」に施されることになる解釈が最終的に問題であるようにわたしには思われる。この点は、先に引用したプロタゴラスの話の上での「演説」を参照するなら、「よさ」「善」の問題であるとも表現されうる。

そして、「有益性」と言ってもよいし「善」と言ってもよいのだが、人々のあらわれをただ単に操作する点に、職業人としての専門知の力を見るプロタゴラス的なことばの解釈は、これらの述語の持つ元来の深さに達することができず、皮相でエゴイステックで不道徳であるというメッセージを、プラトンがなんらかの形で読者に伝えようとしたことも、確かであるようにわたしには思われる。ま

た「脱線議論」のほうでも、後に見るように「弁論」や「ことばの争い」に生きる弁論家やソフィストの生き方に対し「哲学の生」を浮き彫りにしようとしている点で、明らかにこのメッセージにあたる要素を含み持っている。したがって「脱線議論」解説の主たる目標は、プラトン側の深い善理解と有益性理解を、真に道徳的なものの正確な把握という観点から、また幸福という大目的との関連におけるモラリストの立場の成立という観点から追認することにあると思われる。

ただし、脱線議論の趣旨を捉えようとする際、善・有益性の理解の浅さ・深さというポイントで済むと予想することでは、それだけならまだ不足であるように思われる。この点は、以上でひととおりみた「脱線議論」直前箇所と、以下で(B)で扱うその直後の箇所の議論とを予備的に対比することで、明確になる。

そのような直前直後の議論の対比に進む前に、これに関連したひとつの点を押さえておきたい。それは、(A)の議論で「相対主義」と呼ばれるものの究極的性格については、解釈上注意が必要であるように思われるということである。最初に紹介したように、バーニエトは、ここでは価値に関する相対主義が問題なので、それでプラトンは自分の幸福と正義に関する年来の主張を「脱線議論」として「レトリック」的に展開したのだと解釈している。<sup>1)</sup> a―dの述語の四分類において、たしかに焦点はソフィストの「知恵」の核心を形成するdの「有益な」「有益でない」にあるけれども、この議論は四分類全体の呈示においては、ここまでの相対主義と同様に、価

値に特化しないような、形而上学的ないし理論哲学的な相対主義と呼ぶしかないものである。なお、この議論(A)、脱線議論、脱線議論直後の議論(B)を通じてプラトンの標的となる立場を「真理論的な相対主義」と呼ぶことは、むしろ適切でなくなる。「真理」を語るべき領域のひとつ外側に「有益」「よい」を語るべき領域を、相対主義者の側で見いだすようになっていくからである。しかし、このような語り方の変化は、(今のわれわれが哲学的な立場として分類する)相対主義として或るタイプの立場から別のタイプの立場に動いた、という言い方では、正確に追跡できないものである。例外を作るように主張全体を改竄したものの、プロタゴラスは自分の「真理に関する相対主義」を、aとbでは相変わらず維持しているからである。こうしたプロタゴラスのほんとうにトータルな態度変更に見合った、プラトン側のトータルな対応が必要なのだが、それを、「価値というトピック」に関する単に理論的な対応としておこなうことは、せいぜい、相手をあらかじめ矮小化しておいての対応になる。したがって「脱線議論」の意義は、何らかもう少し根本的で全面的な対応の変更を背景とするもの、と考えられなければならないように思われる。

(B)「脱線議論」直後の議論(177C-179D)のテーマは、善と有益性をめぐる現在の判断と未来の判断の身分の違いである。ソクラテスはテオドロス相手に、次のような動詞の時制によるコントラストを同意させ、この対比をプロタゴラスたちも了承するだろうと主

張する。

(1\*) 現在形 相対主義の成立

(1\* a b c) 「有益である」「よい」以外の「甘い」「健康である」「正しい」など

(1\* d) 「有益である」「よい」

(2\*) 未来形 相対主義不成立で専門知成立

(2\* a b c) 「甘いであろう」「健康であろう」「正しいであろう」など

(2\* d) 「有益であろう」「よいであろう」

ここで第一に目立つのは、ソクラテスが(1\*)と(2\*)の対比を、述語すべてに関して成り立つような普遍的区別とみなしている、ということである。たとえば、(かりにプロタゴラスに譲って)酒が(現在形の言い方で)甘いか苦いは、各人の感覚や判断に相対的な真理の領域だとしてみよう。ここのソクラテスは、その点を譲ったとしても、将来の酒の甘さと辛さには農夫の判断が権威を持つという(178C-D)。これは、上の(A)でみたように、「脱線」以前の議論でプロタゴラスが「有益である」を相対主義的真理の適用の例外としたことを活用した主張である(177C-178A, 178A-C)。論敵のプロタゴラスが、(A)で「例外」をいつた「有益さ」「健康である」に関して小規模に認めたことを手がかりに、また、それだけでなく、専門知の権威を医療と自分のソフィスト術のわずか二

分野に関して、い、ち、ど、認めたことをも手がかりにして、例外の範囲をはるかに広い、一般的なものへと拡大しようとしているからである。

しかし、あの「脱線」以前のときとは、微妙かつ決定的に論点自体が変質していることにも、われわれは注意しなければならない。

「脱線」以前にプロタゴラスが知恵の力に基づくソフィストの至高の社会的地位のために主張していたのは、身体的健康というきわめて限定的な特徴にかかわってことの改善に当たる医学・医師を「絶対知」が意味をなす少数の例外と見立てた上で、善・有益性に関わって絶対知を持ち事態改善の権威である自分たちソフィストは独占的で、特権的な知恵を持っている、というものであった。「脱線」以後で明らかに劇的变化がみられ、通常承認される学問的知識と技術すべてに、相対的真理の範囲を超えた文字通りの「知識」としての絶対的知の称号が付与されていることは、ソフィストであるプロタゴラスとの架空の対決が対話の背後で劇を動かしているこのあたりの対話進行において、ソフィストから知恵の独占性も特権性も奪った上での議論である点で、ほとんど完全に逆方向への方向転換が間になされていることを意味するのである。

この点の印象は、直後の議論から始まる三つの議論の独特の特質をみるなら、さらに強化される。未来のことの判断で相対主義全面不成立という趣旨の177C-179Dの議論に続くのは、ヘラクレイトス説の論駁である。つまり、プロタゴラスの相対主義の全面成立を支えると以前みなされていた、ヘラクレイトス流の「あらゆるものがあらゆる観点でたえず変動している」という主張は、世界の何ひと

つのものも何ひとつの観点でも「それ」として押さえること(同一指定すること)ができないという含みを持つがゆえに、じつはわれわれの言語において有意味に主張することに、原理的困難があるという議論(181D-183C)である。さらに、このヘラクレイトス説論駁に続いて、『テアイテトス』第一部の最終議論がくる。この最終議論では、知覚に知識のありかをみた対話者テアイテトスの説そのものが、知識の性質としての「真」は知覚のところと離れたドクサ(判断、考え)の領域に属するので、そもそも人間的経験領域の基本分類の次元の初歩的な誤りを犯すものであったと論じられる(183B-186E)。これら二つの議論は、以上の簡単なまとめでもすでに明らかのように、プロタゴラス説やテアイテトスの第一の知識定義に寄り添ってその主張の意をできるだけ積極的に評価してよくような解明の方向はすでに捨てられた上での、極度に冷ややかなトーンのものである。そしてテキスト上、これだけ大きな議論方向の転換は、「脱線の議論」がはさまれた前後で起こったとみなすしかないのである。

しかし、注意すべき点はこの二点だけではない。脱線以後も、ソクラテスが主導する議論は、先に引いた166D-167Aのプロタゴラスの演説の要求であった、公正で、かれへの友情に基づく議論という「建前」を、崩していない<sup>12</sup>。わたしにはこの点は、ことばだけの表層的なものともみられるべきではないように思われる。そして、未来の判断という立脚点を持つ「脱線議論」直後の177C-179Dにおけるプロタゴラス相対主義批判は、最新の注釈のひとつでティモシー・



チャペルもコメントしているように、この最後の批判という位置にふさわしく、『テアイテトス』中でもつとも強力な批判の論点であると考えられる。この点を、本稿の以下の解釈で詳しくみてゆく。

したがって、著者プラトンの「脱線」以前、以後の急な変化は、プロタゴラス相手に脱線議論によつて非常に大きな成果が上がつたとかれが考えていることの印になると思う。「脱線議論」はこの高名なソフィストとかれの相対主義に、いわば「引導を渡すための議論」という文脈上の意義を担っているものでなければならぬ。以下、節を改め、このような前後の箇所二つの議論の間の特徴的変化を説明できるように「脱線議論」自体を解釈できるか、試すことにしたい。

## 二 「脱線議論」前半部と、その議論の特質

「脱線議論」は二部に分かれる。前半(172C-176A)では、世俗にまみれた勝ち負けの世界の弁論家的な生活と、何の生活の必要にも拘束されない、自由で知恵を愛する探究の生活の対比がおこなわれ、後半(176A-177C)は、ソクラテスによる知恵を愛する人生へのいざないにあまりに感動したテオドロスの「もしあなたの言うことがすべての人々を、ソクラテス、わたしを説得したように説得したなら、人間たちの間に平和が広がり、悪は減ることでしょう」という「大甘」の感想(176A24)をきっかけとして、人間的生活における「悪」の所在の問題の考察と、新たに「神に似た生活」と見

立てられることになる「知恵を愛すること」へのいざないを含むものである。

前半部の長い箇所は、有益性と「知」の問題からみたふたつの生活類型から、知恵を愛する生活のほうへ向かうよう読者を説得するという明白な「効用」を持った話である。一方の類型は「法廷に若いころから出入りしている人々」であり、外的なものによつて自らの自由を捨ててしまった一種の「奴隷」なのであって、利を争う多忙な闘争にあけくれる生活を送っている。民衆の決定という「主人」に「ことばでへつらつて事実でじゃれつく術」を知っているために、つまりソフィストの術や弁論術を習ったために、激しくて辛辣だが、「魂においてまっすぐでない」(173A)。「虚偽と、互いに対する不正の応酬」から性格も思考もだめになっているのに、自分たちでは自分のその現況を「伶俐(*deinai*)」で「知恵がある(*sophoi*)」と思ひ込んでゐるとされる(173A-B)。

もう一方の類型は真に自由な哲学的・学問的生活の類型であり、法廷での争いや一般に世俗的な損得のからむ言い合いなどではうまくなく恥をかくものの、「もともと良い評判のためにこれらを離れたのでもなく、文字どおりかれらの身体のみが、国家のうちに置かれ、住まうのであり、思考のほうは、……あらゆるところを翼で飛行して、……悠々と飛ぶのです。そして、あらゆるしかたで、有るもののその都度の全体それぞれの全自然を究める一方で、けつして近いものの何らかのものへと、自らを低くして降りてはゆかないのです」(173E-174A)といわれる。タレスが天体を観察してい

て穴に落ちたエピソードがこの後に紹介され(174A-B)、「世間から笑いものになると認めながら、その世間への鋭い批評眼を持ち得ていること、財産や生まれの重視という世間的態度を完全に乗り越えたうえで」「その都度その都度で事の全体に注目する」ことができるといわれる(174C-175A)。

プラトンがこの前半部でとくに積極的に主張したいことは、キーワードとしては「それぞれの」や「その都度の」とペアで導入される「全体」(174A1, 175A2)と「本質や本性の意味での「自然」(174A1, B4, C7)と「問題」とに全体をつかみ自然を探究してきた結果得られる「教養」の有無(174D8, 175A1, D6)に示されている。

ギリシア語「*φύσις* (*phusis*)」で表現される「自然」ないし「自然本性」の問題は、「脱線議論」直前で新たに定式化されたプロタゴラスの立場と密接な関係を持っている。そこでは次のようにプロタゴラスの相対主義が成り立つ述語群をめぐる事態が表現された。

・・・しかし、わたしが語る領域において、すなわち、正しいものや不正のもの、敬虔なものや不敬虔なものにおいて、それらの自然本性においては、(*phusei*)、何もそれ自身の有をもつものでなく、共通に思われるものが、そのように思われ続ける時間の間だけ、真になるのだ、と人々は確言しようと思つています。そして、プロタゴラスの言論をそのままでは語らないような人々もまた、何らかのようなしかたで、知恵にかかわつていきます。(172B)

この引用において、正義や敬虔などの、極端な一般性を持つ「善」「有益性」とは異なる個別的な徳目(先ほどの述語分類では「b」に区分される述語群)に関するプロタゴラスの相対主義の立場と、それを背後で支える大衆的な考えが二重になって描かれる。<sup>15</sup>「脱線議論」は私見では、直接には大衆の考えを退け、大衆流・俗流では無視され、みえない自然本性に近づく探究者たちの実践しているものに定位し、その実践のリアリティに基づいて、またその実践のリアリティを共有しているかぎりの人間として、大衆の見解を利用するプロタゴラスの立場に対する自分の反対意見を述べようとする議論である。

自然本性の探究は自然本性の探究であり、主題の限定なく自然、人間、社会に関わるありとあらゆることからいつて当時おこなわれていたものである。プラトンは一時代前のソクラテスとテオドロスにこの会話をさせているが、もちろんかれの学園アカデメイアにおける諸探究の目を見張る成果群を背景としてこの議論を書いている。これは端的には「その都度の全体」を考えることができ、そこからのものを観察し、ものを考える態度であると言いうことができるだろう。そのようにみたり考えたりする生活は、当然、探究に熱中することの反面で、みることに徹しない俗人や大衆から軽蔑されるような数々の失敗にもいたる。しかしこの箇所ですクラテスが声高らかに言い放ち、テオドロスが裏打ちすることは、適切に探究した人間は事柄をより深く理解する、という「当たり前の

事実」である。そのことをソクラテスは、俗人・大衆たちの教養のなき、全体の無知ゆえの滑稽な認識の誤りとして描いている。財産、門地等の重視をする大衆的「幸福」像もこのような誤りと関係づけられる。「それぞれの (hekaston) (174A1)」「その都度その都度 (aei) (175A2) いずれも、ソクラテスたちが、「穴に落ちたタレス」を嘲笑したトラキアのお女中や、刑死したソクラテスを馬鹿にしたアテナイその他各地の弁論家や民衆や、大衆の意見に乗って立場の表現を作ったプロタゴラスと、生の現実の場で対等かつ直接的に「言い合い」しているシーンであることを示す。「知恵を愛する」哲学者・学者・探究者たちのグループは、世間的な「失敗」をして穴に落ちることもあるし、裁判に負けることもある。しかし大衆もソフィストも待ったなしの現実を認識することについて「失敗」続きなのであって、そして恥知らずにも無教養なのであって、まるでものをみることができていないのだ……。この「ガチンコ勝負」においては、『脱線議論』のソクラテスとテオドロスは、過去の事実的学習と事実的探究を自分の財産として持つ人間を代表して「自分というもの」を前面に出すことによって、ここ直前の議論(A)からの先の引用における正義や敬虔に関する相対主義の成立を支えた視点ではない、それに対抗して優越できる別の視点を用意しているように思われる<sup>(16)</sup>。

前半部の最後には、法廷的な世俗的生の内部の人間が、まさにそこいながら哲学的生に向かつてゆくことができるような「問い」の系列が紹介される。それは、次のようなものである。

#### 正義の問い

(1) 何の不正をわたしはきみにはたらいっているか(何の不正をきみがわたしにはたらいっているか)?

(2) 正義と不正とは何か? 正義と不正はどのような点でほかのものと異なるか? どんな点で正義と不正は互いに異なるか?

#### 幸福の問い

(1\*) 王は幸福か? 財産家は幸福か?

(2\*) 人間的幸福と悲慘とは何か? 人間の自然本性にとつていかなるしかたで幸福に向かうのがふさわしいか?

(1) (事実に相手との言い合いのシーンなどで発話される) と (1\*) (たとえば『ゴルギアス』では、若き弁論家ポロスが王の幸福を前提していることにソクラテスが疑問を投げかけるところから<sup>(17)</sup>、哲学的問答への入門的対話が起ころ) から (2) と (2\*) へ向かうとき、世俗的・法廷的人間はほとんどめまいのような感じになりながら不得意なことに取り組むことになるという。このような問いの上昇の系列は、すでに「穴に落ちたタレス」の挿話の脈絡で、知恵を愛する者たちの実践している問題の研究の形で示されていた。すなわち

人間に関する問い

(1') あの人は何をしているのか？

(2') 人間とは何か？ 人間というビュシスにとつて、他のものもろのものとは異なる何をなすことがふさわしいか？ 他のものもろのものとは異なる何をなされることがふさわしいか？

の区別は、自明であるとされていた(174B)のである。

——以上の前半議論は、広い意味では「議論(argument)」だが、問いの系列は単に事柄がどうなっているかの説明というより、ベテラン知識人二人の対話を聞いたたり読んだりする若い人に、前の問いから後ろの問いへと関心を向けさせ、かれらを哲学的な生活に入らせる効果を期待するものでもあることは明らかである。ここまでの紹介でもただちに理解できるように、バーニエトが的確にみたような「レトリック」という側面を強く持つている。また、「対人論法(argumentum ad hominem)」であるともいえるだろう。最後にテオドロスが感動のあまり口にする「すべての人々を、ソクラテス、わたしを説得したように、説得するならば」は、著者によるこのことの積極的容認である。テオドロスが若いころのヘラクレイトスの言説やプロタゴラス派とのつきあいという「迷い」からいわば転身して、学問の道へと向きを変え、幾何学者として研鑽をつんで大成した<sup>(18)</sup>という事実を背景に、ふたりの対話は仕組まれていたからである。しかし、この文脈で「レトリック」であるから論としての価値

が二次的であるとか、論法の整理において「対人論法」に分類されるから質的に劣ることになるといった評価を、性急にくだすべきではないように思われる。

まずこのことは、事柄において、そうであるように思われる。そして、初期の終わりのころから中期にかけて、『ゴルギアス』と『メノン』から『パイドロス』『パルメニデス』までのプラトンは、そのことを熟知していた。<sup>(19)</sup>一例として『国家』の「太陽の比喩」(VI, 506B-509B)を考えてみよう。太陽の比喩の議論では、〈見るもの〉と〈見られるもの〉の間に太陽が介在して光を提供し、原因であるが、おなじように〈知るもの〉と〈知られるもの〉の間に原因として介在するのが善そのものであり、善のアイデアこそが、〈知られるもの〉には真理性を付与し、〈知るもの〉に知る力を与えるものだと論じられる。この比喩のポイントは、間の媒体の透明性にあると思われる。視覚空間の透明さを支える究極の原因が太陽であるように、そのように知性的認知ないし思考の「空間」の「透明性」を支える究極の原因は、〈善そのもの〉なのだとプラトンは主張している。したがって、〈善〉こそが最大の学習事項であるという『国家』の主要テーゼ(502C-506B)が導かれるのだが、注意すべきは、こうした議論が或る程度学問探究の経験を積んだ、それなりに学習の意義を知っている人々のあいだでしか説得力を持たず、またそのように意義を知っている人のあいだでの学習の進み、深化の度合いによつても、連動する認識の透明度の変化に応じて、議論の理解自体がそれぞれまちまちになるだろう、ということである。「比喩」で

プラトンが語ったこと、またその比喩を「太陽の比喩」「線分の比喩」「洞窟の比喩」と三種類も用意して別のニュアンスの議論をおこなったことについては今深入りできないが、単純に「善とは何か」の定義や説明が理論的な意味で「困難」だからという説明では済まないことのように思われる。

バーニエトが解釈したように、ここには、価値に関する、「相反するあらわれ」に特有の問題が隠されている。相反するあらわれにおける相反性の中身は、たとえばおなじ風が或る人には寒く或る人には寒くないといった、「人を選ばないとみなされる事態」ではなく、その人の学習歴や倫理性や人格の力の「人の優劣」に直結するような相反性が問題であるということが、理論的には、プラトン哲学的な対応になるはずである。これは、プラトン理論のどのような特性がそうした相反性の特質を完全に説明する最終的な答を用意するか、きわめて厳密に考えて判定しなければならない問題である。

ここに、解釈論争として、イデア論が十分な答であるとする「統一体系派（ユニテリアン）」と、イデア論以後の後期のプラトン理論でなければ答にならないとする「発展主義派」との間の激しい論争が、「脱線議論」をめぐっても成立する可能性がある。

しかし、まさに以上の状況であるがゆえに、「脱線議論」を「ただのレトリック」と言うことで済ますことは、当を得ないことになるとわたしは考える。すなわちプラトンは、厳密さが要求されるべきところでレトリック程度で済ませるという選択をしたのではなく、むしろ、そもそも「骨太な働きかけ」とそのためのミニマムな

「理論」でよい場面なので、そのとおり、簡略で、インポイントのレトリック的説明を選んだのだ、とわたしは主張したい。すなわち、『メノン』でも『パイドン』でも『国家』でも『パイドロス』でも、プラトンは理論体系の提示を著作執筆の第一の目的にはしていなかった。かれは、進歩と「よくなる」という意味の人々の幸福と共同体の福利のたえざる向上を、同時に目標にしていたはずである。

したがって、そのような中期理論に関連した話をすべき「脱線議論」でプラトンが「参照」としておこなうべきことは、おもに理論としての特定性の強い「厳密な議論の再現」の方向なのか、それとも理論の特定性よりも適切な働きかけの「言語行為的な質の保存」のほうなのかといえば、後者なのではないかとわたしは考える。

第一に、中期理論と「徳の倫理学の背景となる道徳心理学」の基底にある、価値や徳の認識が道徳的知性の程度に応じて、微細で、絶対的な優劣の差を持つという論点が、そのことを示唆している。かりにその優劣のグレイドのなかで一番優れた理論や認識を議論して述べることはできたとして、そのことが、価値に関する相対主義や相対主義一般との対決という脈絡で適切なこととはかぎらない。価値が問題となる場面でのあらわれの「相反性」の主たる実質がまさに優劣の差であることを理解させるべきときに、今現在もつとも優秀と思われるあらわれをピックアップして精密化・整備して叙述することが適切とは思えない。第二に、中期「理論」は否定しがたく現状改変的(revisionary)なので、そして絶対的に善い方向への現状の改変のための人の養成・教育という議論の目標があったた



めに、「脱線議論」でその内容に言及するときも、この特質に厳密に応じた参照でなければならぬはずである。『国家』が中心部分において自然本来性への視線のもとでの理想国家論であること(III 369A ff.)、およびたとえば洞窟の比喩で「魂の向け変え」に言及してゐること(VII. 521C-541C)は、そのもつとも顕著なしるしだが、中期理論自体が、この件の本質に則つたものとして変化への一定の動きを作るといふ著者の言語行為的な関心を離れては成り立たないものであつたことは、明らかである。

『テアイテトス』中の166D-167Aのプロタゴラスの「演説」であらわれを「よいもの」へと変化させようとしていることと、その点に独占的で特権的な「知恵」をみようとしたことが、171D-172Bのソクラテスの提案においてディアレクティケーの主題の位置をもうよいよ占めたことは、同時に、「変える」ということ、「知恵」というものに関するソクラテス・プラトン派の「本人状況」とでも言うべき状況を作り出したとわたしは考える。もはや、第三者としてこれに関わり、プロタゴラスの立場の単なる祖述と批評に従事する「第三者状況」ではないものへと、対話は突入せざるを得ない<sup>(2)</sup>。

この文脈の特質は、中期理論の参照の仕方をも限定する。特定性の強い理論としての理論の参照よりも、人間の世界の中で知恵や学問知識というものが一般に持つ変化への責任や実績を、知恵と知識の趣旨に即して語り、理解させることが必要である。趣旨に即して内容を説明し、趣旨通りに働きかければ、それでよいように思われる。そして「脱線議論」の言語は、まさにそのような要請にびたり

応じたありかたをしていると思うのである。ソクラテスもテオドロスも、そして著者プラトンも、ここでは純粹に理論的のもののみをみるという態度ではなく、生活という全員の課題の中で「どのように生きているか」という具体的かつ実践的な局面で自分(たち)の「知恵」に関する見解、「変化」に関する見解と、自分たちの徳や長所が「人々」とのかかわりでいかなる意義があるかを語らなければならない。ソフィストとの対決はいつかどこかでこのような局面を迎えると思われるが、著者はまさにこの文脈こそその最終対決の場合のだと考えているはずである。

著者プラトンが中期対話篇に続く『テアイテトス』篇執筆においても、一般に議論とレトリックのあいだの論法の優劣の差をことさらに強調する考えでないことは、いわゆる「相対主義の自己論駁」という、この箇所少し前の議論の総括の場面でソクラテスの口から表明されていた。つまり、故人であるプロタゴラスは、かれの相対主義の教説が反对者を多く抱え、しかもそれが相対主義であるがゆえにプロタゴラスも反对者の意見を真理とみなさざるを得ずに、「自己論駁的」だというソクラテスとテオドロスの議論に対し、何回もあの世から出てきて自分たち二人を論駁するだろうという予想を述べる(171C D)。相対主義の問題はそもそも純然たる「議論」で決着がつく性質の問題でなさそうだというプラトンの予想が、背後にあると思われる。注意すべきは、これに続くせりふである。

しかしわたしは、われわれは自分たち自身を、われわれがいま

あるが、ま、まに用いざるを得ず、その都度思われることを語らざるを得ないと思うのです。いまも現に、或る人は 別の人よりは知恵があり、また或る人は別の人よりは無知であるという、すくなくとも このことはだれでも同意するであろう、と主張しようではありませんか。(171D3-8)

一種の「開き直り」とも受け取れるせりふであるが、私見ではそのように解釈すべきではない。<sup>23)</sup>「自己論駁」の議論は、こここのせりふにあるように、プラトン自身によつては、(通常そう解釈されているように)形式的に相対主義の中の矛盾を析出して葬り去ろうという議論とは、解釈されていなかったとわたしは思う。その始まりは、プロタゴラスが一方で知恵を誇り、他方でかれの主張内容が相対主義(真理に関する相対主義)である<sup>24)</sup>との確認(170AB)にあった。そして、この「論駁」のルールも、プロタゴラスが「演説」で苦言を呈したことを受けて、プロタゴラス自身の発したと思われる言葉に限定した、紳士的で公正なものというものであった(169E-170A)。しかし、「自己論駁」の議論の主張では、まさにそのようにプロタゴラスのリクエストに完全に応じて話をしようとする、プロタゴラスはそうしたかれにとって理想的な対話の中で、結局かれの「相対主義的真理の話」を、かえって導入することができなくなる。<sup>25)</sup>すなわち、他者はかれの相対主義に同意せず偽だというのだが、プロタゴラス自身は人間が全員真を判断するという立場なので、ここでの他者の言い分を真と認めざるを得ず、そこから

自分の相対主義説を偽と認めざるを得なくなるという(171AC)。

——これは、一見幼稚な誤謬に基づく議論に思えることだろう。なぜなら、プロタゴラスは他者が自分の相対主義説を偽と判断する際、それは、他の者にとつて偽であると主張すればよいし、他者の自説に関する判断は、その他者にとつては真であるが自分にとつて偽であり、したがって自分が自分の相対主義説を自分にとつて真なるものとすることはできるからである。しかし、以上の修正によるプロタゴラス擁護がかりに可能だとしても、その一方でプロタゴラスの「知恵」への積極的荷担とどのように関係するのか、明確でない。明確にする単刀直入な方法は絶対的真理への素朴な荷担のままでいることだが、そこでは「自己論駁」が起こる。私見では、プラトンの議論はこの点を印象的な仕方でもイラストレートするものであつて、知恵の優劣を相対主義的真理説そのもののソフィスティケーションで、なんらか積極的に表現する途は、プロタゴラスには閉ざされているように見える、ということが究極的なポイントである。

——以上の解釈を、テキストの議論順にまとめておこう。相対主義の自己論駁の議論終了の時点で、ソクラテスとテオドロスのグループがプロタゴラスと171D-172Bの議論Aで対峙するときに両陣営がともに承認する基本前提は、知恵における個人の優劣の差が存在する、というものである。プロタゴラスがこの点を「演説」で訴えていた。したがってかれは、「相対主義の自己論駁」の議論に対して全面的に賛成しようがしまいが、いずれにせよ議論のルールか

ら言つて、この前提の指摘には、かれの側で賛同しなければならぬ。知恵の優劣と相対主義真理の両方を同時に唱えるプロタゴラスの立場が、少なくとも「説明を要するもの」であることは、「自己論駁の議論」が或る程度の説得力を持つ——そう思うが——かぎり、その終了時に、理解されるように思われる。そこで、プロタゴラスは議論Aにおいて、この共通の基本前提を、すべての人々のほとんどの述語を巻き込む判断の真理性が相対的真理であるとした上で、「健康」「健康でない」と同様）例外的に「有益」「有益でない」に関して人々のあらわれを変え、る力にみようとする。

これは、ラディカルな理論修正である。というより、ラディカルであると同時に驚くべきで唾棄すべき態度、修正である。厳密に言つて議論の上での「プロタゴラス」が真理に関する相対主義から価値相対主義に「立場を変えた」とか、「力点を移動させた」とはいえない。間違ひなく、対話の上で立場が再構成されるかれは、何か別のことをしているのである。したがつてソクラテスとテオドロスのほうでも、この変更に伴う自分たちのラディカルな態度変更をおこなうことになる。全員あらわれをソフィストになされるが、ま、という、黙つて見過ごすことのできない種類の「自他の非対称」をソフィスト代表としてプロタゴラスが説こうとしている以上、ここまではそうするしかないように思われる。これは、机の上に置いたお金にだれかが手を伸ばしてきたらだれでもつさにそれを防ごうと手を出すと、将棋やチェスで相手が禁じ手を指した瞬間、だれもがゲームを続けず即座に違反であると申し出るのと、おなじレベルの

ことである。「脱線」が必要になるのは、ここに動機がある。そこでかれらは、怠けずに一生を捧げるかたちで探究してきた特定個人としての教養の歴史に従つた、自分たちの変化や知恵の考え方を述べる。著者プラトンにひきつけて言えば、それは中期理論全体の或る形での参照になる。この参照は理論的な特定性を重んじなくてよい。重んじようとすると、いまや「危険な存在」にしか思えない人物を相手にする、対プロタゴラスの趣旨には、かえつて合わなくなる公算が大きいし、変化や知恵の基本的な考え方をそれとして正当化することは、論敵がこの程度にわれわれの常識や社会性を共有しない場合には、理論の特定性のほうには自由度を与えておいて、変化や知恵というものの「趣旨」を、人々の営みそのものに即して、しかも心あるだれにもわかるように語らなければならないと思われるからである。

### 三 「脱線議論」後半部と、「脱線」直後の議論における「未来のあらわれ」の問題

「脱線議論」後半部の解釈に移ろう。ここでは人間の世界における悪と不正の存在はいつまでも続くことと、神は悪からも不正からも免れていることの確認の上で、人間は「死すべき」人間の身であつても「不死の」神に似た生活を目指すべきだという、その後の古代の思想世界を支配した重大な考え方が簡潔に述べられる。ソクラテスが語る、それほど長くない主要部をまず全文引用しよう。



に「加工材料」や「変形の素材」とみなして知恵の資格から除外しようとした「人々のあらわれ」の中に、知と無知の間の絶対的で実質的な差を見ている。その上で、そこであらわれの中で上位にくる「知性」であればそもそももっている実践性や道徳性を、「人間の自然本性」という観点から説き起こしている。そして、そのような説き起こしは、むしろこの『テアイテトス』でプラトンが新たに読者に向かつておこなわなければならないことというより、これまで手を変え品を変え、語り方に工夫を凝らしながらやってきた「あの話」の再現なのである。これは『テアイテトス』の大部分を占める分析的議論の話よりも大きな(172B8-C1「・・・いまや、より大きな議論に捕まっています」)、人生の意味と道徳性に関わる主題である。

「悪」がかならず問題となり、それを避けるという仕方、で生きることが必要な「死すべきものの本性(*ten tînên phusin*)」(176A7)が、話の焦点となっている。そして第二段落では不正のない神の姿を記した上で「われわれのうちで、できるかぎり正しくなった者ほどに、神に似ているものは、何もありません。この点をめぐって、真の意味での人の伶俐さ(*deinotês*)があり、逆に、無価値さと女々しさも、この点をめぐっています。なぜなら、このことの認知が知恵(*sophia*)であり、真実の徳であり、これを認知しないことが、明々白々の愚昧と悪徳であるからです」(176C1-5)という核心部の主張が述べられる。

引用箇所では、「知恵」や「賢さ」の通用している意味の全体か

ら、悪党にも帰属される、ただ単に手段を考案する「頭の良さ」の利口さやクレバーさを排除して、道徳的に純化することがもくろまれている。この純化は、語っているソクラテスとテオドロスの長年の経験から得られた実在の感覚と善悪の基本的感覚の淡々とした確認により、この対話を聞いたり対話篇を読んだりする、より年少の人々に自覚を促すという形で遂行される。善悪の絶対的な差と、悪に陥ることの現実の脅威をみずから自覚しないでまっとうな人生を送ることはできない。このことには深い理由付けもありうるし、やや浅い理由付けもありうる。しかし、若い前途ある人間は、いずれにせよそのことをもってまず人生を生きないことには、人生の意味にも、「知恵」にも、けっして到達することはできないのである。

ここに、議論Aの極端な見解にまで迫り込まれたプロタゴラス的な態度と、そのものになっている大衆のゆるい倫理観を、最初に捨て去ることの必要性和意味があるように思われる。

「議論B」とした「脱線議論」直後の議論への影響として、だれでも気づくもつとも目立つ点は、次の二点であろう。

- ① 議論Aのプロタゴラス的立場では有益さと正義・敬虔はまったく別の分類に入つたのに、「脱線議論」および議論Bでは、善さと有益さが敬虔・正義と同グループであること
- ② 人生の問題へのアプローチ自体が、人々の「課題」であつて、モラリスト的に現に善くあることの至高性が謳われ幸福に正義と敬虔が必要であることが主張され、「知恵」はこ



のモラリスト的な人生観を理解することを含む（「このことの認知が知恵（*sophia*）であり、真実の徳であり、これを認知しないことが、明々白々の愚昧と悪徳であるからです」（176C3-5）」と「脱線議論」で主張される。そして、これにおそらく呼応する形で議論Bでは、「ソフィストの知恵」の人間経験全領域に及ぶ独占性と特権性はもはや前提も主張もされず、あらわれの有益性に関する「ソフィストの支配」からいわば解放された人々の能力のうち、各領域ですぐれた専門知というものがそのそれぞれの領域の権威にして知恵とされるにいたること

これら二点のその後の運命をもつとも早く瞥見するために、いったん「脱線議論」に続く議論Bの解釈に移ろう。おそらく、この議論Bが、『テアイテトス』第一部のプロタゴラス批判で最重要の議論なのである。前にふれたようにここでプロタゴラス説の主題的検討はいったん終わり、第一部の残りふたつの議論は、ヘラクレイトスの万物流転説の批判と、テアイテトスが提案した知識は知覚であるとする知識定義の最終論駁になるからである。しかし解釈の伝統において、ここには奇妙な事実が存在する。『テアイテトス』の議論ごとに二次文献を紹介するバーニエトの次のコメントが、この事実をもつとも明確に告げている。

177C-179B わたしは、未来に関するこの極度に重要な議論に関

『テアイテトス』の「脱線議論」（172C-177C）の意義と内容について

する一定内容を持った哲学的分析をひとつも知らない。このギャップをみて、知的冒険が好きな読者は古代のもつと後の時期に行為の必然性からの議論が、相對主義でなくその近いライバルであつた懷疑主義と戦うために用いられたいろいろなやりかたに関して、何かを見つけだそうとするかもしれない。<sup>26</sup>

議論Bの主題が「未来」であるという言い方が本当に最終的に正確かということが以下の議論のひとつの論点になるが、それは少しの間措くとして、バーニエトがここで指摘している事実は、驚くべき事実なのである。ただし従来このような軽視にも、理由や言い訳の材料がないわけではない。議論自体を簡単に紹介したのち、そのような理由と思われるものを考えながら、適切な解釈の方向を探ることにしたい。

議論Bは、正しきとの対比のもとで有益さと善さをめぐる議論Aの立場を確認することから始まる。つまり、有益さが、「有益である」という言葉の問題でなく実質的な有益さの問題であるかぎり（177D-E）、「・・・立法する国家は、それ「有益なもの」をどう名指そうが、それをきつと目指しており、あらゆる法を、自分の考えと力及ぶかぎり、自分にとつて、できるかぎり有益であるように定めるのです。あるいは、国家がこれ以外のことをにらんで立法するでしょうか？」（177E）とこうように、意図のレベルでは、あらゆる国家ないし立法者が有益さないし善に照準を合わせて立法行為をすることを承認したのち、しかし事実上は、「それぞれの国家は多

くの過ちを犯す」こと (178A) を指摘する。議論Aではソフィストの至高の知恵のために語られたこのおなじ材料を、議論Bのソクラテスとテオドロスは、今度は現在時制と未来時制の劇的な違いという一般論の論点のために用いようとする。ソクラテスは次のように提案する。

いま、このようにすれば、つまり、有益なものがそこに事実属するようすすべての種類において、人が問うならば、さらにいっそう強く、万人が同じこの点を同意するでしょう。そのような種類は、きつと、これから将来する時間をめぐるものでもあります。なぜなら、われわれが立法するとき、以後の時間に、法が有益で「あるであろう」ように定めるからです。これを「未来」のように呼べば、われわれは正しく語っているでしょう。(178A5-10)

これが、「未来時制」を主題としてはじめて導入するせりふである。このせりふのすぐ後には、プロタゴラスの相対主義が現在時制では成り立つと認められても、ここで導入された未来時制では全面的に不成立になり、むしろ専門知のある、なしで劇的な差が出るといわれる (178B-179A)。ゆえに、本稿でもつとも問題である、議論AとBのあいだの劇的な論調の違い、(そして、その違いを説明できるのは、両者の間に挿入された「脱線議論」だけである) を理解するには、こここの引用箇所を読解が鍵を握るとわたしは考える。

新しい提案では、おなじ「立法行為」でも、未来の「以後の時間に、法が有益で「あるであろう」ように」定めたもの (178A8-9) が、多くの場合過ちであるという事実を容認する (178A1-3)。そしてソクラテスとテオドロスは、このようなところに、さまざまな専門知のある、なしが意味をなす領域を見いだす<sup>27)</sup>。

このことは、〈未来〉を主題としていわれているが、いま、この知覚的認知における個人のパワーの問題として述べることもできる事態である。まず、引用箇所は、「意図において」と「事実上」の相違の別表現にすぎないからである。そして第二に、対話篇全体の主題である「知識 (epistēmē)」に関し、主題の導入をおこなった議論は知恵 (sophia) と知識の同一視を主張するもの (145D-146A) であったからである。この点は、倫理、諸徳、人の自然本性、政治、知のすべてが課題となる「脱線議論」の介在により、新たに否応なく想起されることになる基本的事実であるのでなければならない。ただし、たとえそのような「脱線」がかりになかったとしても、冒頭の知識と知恵の同一性テーゼによつて、知識の問題は究極的に個の力の問題であり、その人がその場でおこないうるものの絶対的な問題 (徳としての知恵の問題) であったと考えなければならぬ。

プラトンが、知識のパワーが劇的に異なる場合として例に出しているのは、順に、熱に關しての医者と素人、酒の甘辛に關する農夫と素人、音の不協和・協和に關する音楽家と素人、食の快樂に關するコックと素人、法廷弁論の説得性に關するソフィストと素人

(178CE)であり、こうしたそれぞれの領域では、現在のことは各人が權威であり、「尺度」であつても、「未来のこと」は(専門知や専門技術が確立されているところでは)その道の玄人が權威で尺度になるという。このすべてにおいて、未来の適切な行動に向けて現在持っている個人的なパワーが問題になっていることは明らかである。過去の技術の修得により、或る専門家であればその専門の領域において経験しているとき、素人にはない読みで未来に向けた何らかの特別の力を發揮できる、ということが論点である。

「ソフィスト」が議論Aの知識人中、並ぶ者のだれひとりいない圧倒的最上位の地位よりは格下げされて、議論Bにおいて大勢の中の一人として法廷弁論における説得術という「専門」のところで權威とされること(178E)が注目に値する。むしろこれは一種の冗談であつて、次の『ソフィスト』でソフィストの正体、ほんとうの特質が問題になり、その問題一個で重要対話篇ひとつが書かれなければならなくなる、ということの予兆が示されているとみるべきだろう。ただし、『ソフィスト』においても、ソフィストを批判する第一着手は、ソフィストが「あらゆることの知恵」を標榜することの「嘘」に気づくことだから(232B-233C)、それでも「議論A」に似た世界から、そうでない世界に移行してにおいてソフィストを敵対者として規定しようとする態度がみられるといえる。つまり、『ソフィスト』でも「脱線議論」および議論Bの基本態度が、最初に踏襲されるところから始まっている。

以上の解釈で、議論Bの言語が主題を「未来の知覚の話」と設定

『テアイテトス』の「脱線議論」(172C-177C)の意義と内容について

していることは、なんらか特別の説明を要する事柄になる。わたしは、これはこのあたりの一連の議論の論脈の要請によることだと解する。つまり、ここは、テアイテトスが提案した「知識は知覚である」という知識定義の検討の文脈であり、(現在時制の)知覚における「相反するあらわれ」の論点は、そのような検討をそもそもしようと思うことの「第一の動機」に当たるものである。したがって、当の論点自体は、この文脈内では不問に付され、前提として固定されていなければならないかと思われる。それゆえ現在時制に関連する個人能力の検討もまた、この論脈の規制により、「未来の知覚の問題」という形でしか、扱えなかつたのだろう。そしてここに、第一部最終議論でいともあつさり議論の場面が、知覚から「心」の内容としてのドクサへと切り替わらなければならなかつた事情もまた、ほぼ視野に入ってきている。この切り替えは議論舞台の転換であり、当面の哲学討論自体を終わりにするものではないので、プロタゴラスの立場も、そこで検討終わりというわけではなく、実質的に『テアイテトス』第二部以後と『ソフィスト』全篇で継続して主要議題になるのである。<sup>29)</sup>

「未来の話」としようが、「いま・この経験において未来に向かう各個人の個人的パワーの話」としようが、議論Bの論点は、あまりにも当然の論点であると受け止められるかもしれない。<sup>29)</sup>同時に、このような論点のために何か特別の前提や特別の議論が必要であるとは、思えないだろう。しかし私見では、このような或る意味ではだれもがもつ印象が、このあたりの箇所 of 適切な解釈の登場をさま

たげてきた要因なのである。議論Aとまるで違ったストーリーになっていくことが忘れられ、その違いの源を探る努力がなされない結果となったからである。

この「当然の論点への帰還」が「脱線議論」においてなされたということが、究極的に解釈の形で説明されなければならないことである。とわたしは考える。議論Aの時点でプロタゴラスは有益さに関して自分の特権的な知恵を、人々のあらわれすべての上でそれらを有益でよりよい方向に変えるパワーとして提示した。「脱線議論」では、このようなソフィストのプロタゴラスを待ち望む大衆のあまりにゆるゆるの倫理観と学問蔑視の光景が捉えられ、それに対抗する知識の担い手の姿もまた、そのような人間の代表であるソクラテスとテオドロス自身の口から、描写され、裏付けられた。——議論Bの出発点の視線がそうであるように、われわれも有益さの問題を言葉だけの問題でなくその実質の問題としてみれば、有益さとは、究極的に、「自分にとつてのあらゆることの意味づけ」の問題に他ならない。

この問題に、議論Aにおいて表現されるプロタゴラスの立場を横目で見ながら、それに十分対抗できるようにひとが知と倫理に信頼を置いてノーマルにやっていることの正当化をおこなうという観点で挑むことが、目標になったはずである。そして私見では、「脱線議論」はまさにこの種類の問題に、適切に答えるものであった。適切性のもっとも根幹に来るのは、人間の自然本性の問題を「知」という場面でみようとしていることにあるとわたしは考える。その事

情にひととおりの説明を与えて本稿を閉じることにした。

われわれは知識を修得し、賢くなり、伶俐で知恵ある者になろうとする。これはわれわれが、幸福になりたいと考えるからである。そして言うまでもなく幸福と善は、「人間くさい問題」であって、「人為」の制度や慣習の中で、個人をもてあそぶ運や個人的なものの「くせ」も大いにからむ事象である。——プラトンは、まさにこの各方面の学者もあらゆる宗教も大小の「説教」も大衆演説家も登場する場面で、自分の説への参照を試みる必要があったとわたしは考える。

「脱線議論」中で「死すべきものの本性」(physis)への言及(116A7)がプラトンの幸福論の特質を一語で言い表している。「死すべきもの」とは不死の神々に根本的に対比される「生き物」のことであり、プロタゴラスの立場の論評のなかでの植物に知覚があるという話(117B-C)がどこまで本気かはよく分からないものの、著者プラトンが動物一般の能力としての知覚のなかで人間の知覚の力を主題にしていることは、間違いない。

動物の知覚は「動体知覚」として行動に直結しており、そこに、動物的〈生活〉とその〈質〉を語るときに中心的な「場」がある。われわれが準備なしに知覚を考察するときに中心的に成り立っていると想定しがちな静止物の静的な知覚が、かれらの生活の中でもなんらか中心的な役割を占めていることは、単純に非現実的であると同時に、但し書きなしに放置するなら悪しき形而上学を生むだろう。一頭の鹿が逃げ、一頭の豹がそれを追うとき、すべてが一連

の動きの中で終始しているはずである。見ることや音を聞くことやにおいをかぐことは、鹿の逃げる動きの中で、かれのステップの踏み方や外部環境のアンジュレーションに沿った走路の取り方やスピードの緩急、急発進による攪乱等の動きの準備と連動し、直結している。豹がその動きに自分の動きを重ねてゆくとき、豹の「知覚」は、かれの動きの中に一定の表現をみている。これも、見ながら聞きながらのスピードの上げ下げ、獲物をずるい罠にかけるものもろのフエイント動作の選択をじかに生んでいる。こうして或る場合には鹿は無事逃げおせ、或る場合には死体をさらして豹に食いちぎられる。知覚が「力」であるのは、もともとこのような情景での運動・動作に連なつて滑らかに発揮される機能として、である。

タレスは星空を見ていて穴に落ち、ソクラテスは倫理問答の末有力者ににらまれて訴えられ、敗訴して毒杯を仰いで、ふつうはもつとも軽蔑される死刑囚として死んだ。では、この失敗は、かれらのなんらか絶対的な力の不足を意味するだろうか？ いや、それは全然、逆なのだ。「脱線議論」は訴えている。問題はわれわれが人間同士として人間の動きの中で人間の動きを見る、知覚するということに徹するかどうかである。徹する場合、われわれ自身も人間である自分の動き・活動をひとつの鏡のようにしてそこに映る他者の動きを見る。自分の実力に応じた、近似的に正しい判定しか、くだせないからである。ただしこの場合、この限定のもとでタレスもソクラテスも、純然たるかれらの生物的力量込みで受け止められる。つ

まりかれらの知恵の徳が、（われわれ自身の判断力の中で）額面通りに受け止められる。タレスもソクラテスも、現状を適切に変える力としての知識を承認されるだろう。そうでない場合、つまり単に結果としての一回的失敗を喰うという場合、われわれはじつは活動者が活動者を見る場面ではないものを初めに勝手に想定しているのである。ソフィストのプロタゴラスが、万人のあらわれを静的な、加工の単なる素材にすることが「できた」のは、じつはこのような、生物としての人間の評価の原初場面から一回目をそらし、他者にもそのような変態の見方を薦めたからに他ならない。われわれは原初の自然本性の場面に戻らなければならない。そこは、他者とわたしがともに生きて、死んでいける場所であり、あらゆる行為も活動も、規範からの批評を受けることを免れることができない、そうした場所なのである。<sup>(51)</sup>

### 引用文献一覧

- Barker, A., 'The Digression in the *Theaetetus*', *Journal of the History of Philosophy*, 14(1976), 457-482.
- Burnyeat, M. F., *The Theaetetus of Plato, with a translation by, Leveti*, Indianapolis 1990.
- Chappell, T., *Reading Plato's Theaetetus*, Sankt Augustin 2004.
- Comford, F. M., *Plato's Theory of Knowledge*, London 1935.
- Labriola, D., 'Plato v. Status Quo: On the Motivation for Socrates' Digression in the *Theaetetus*', *Apeiron* 45(2012), 91-108.
- McDowell, J., *Plato Theaetetus*, Oxford 1973.
- McPherran, M. L., 'Justice and Piety in the Digression in the *Theaetetus*', *Ancient Philosophy* 30(2010), 73-94.



- Polansky, R. M., *Philosophy and Knowledge: A Commentary on Plato's Theaetetus*, Lewisburg 1992.
- Ryle, G., *Plato's Progress*, Cambridge 1966.
- Sedley, D., *The Midwife of Platonism*, Oxford 2004.
- 渡辺邦夫 (2004) 訳注『テアイテトス』ちくま学芸文庫
- (2006) 『相対主義の貧困——『テアイテトス』169d-171d』『ギリシア哲学ゼミナー』第三巻1-14頁 (ギリシア哲学ゼミナーHPで公開)
- (2012a) 『テアイテトス哲学における人間理解の研究』東海大学出版会
- (2012b) 訳注『メノン』光文社古典新訳文庫
- (2012c) 'Socrates Considered as a Victim: Socrates in the Ancient Athenian Court', *Love, Vulnerability and Victimology: Annual Report 2011*, 97-109.

## 注

- (1) 渡辺 (2004) 108頁。以下、翻訳は同訳による。
- (2) McDowell, p.174 (cf. Ryle, p.158). マクダウェルのこの診断はかれなりの脱線議論の趣旨理解に基づく。すなわちかれは、プラトンには、プロタゴラス流の「任意の人にとって正しく考えることはその人にとって正しい」という主張は、受け入れがたかったはずで、これへの反対議論が本線からは遠いものになるという点を根拠に「脚注」云々と言ったのである。ゆえにマクダウェルの趣旨理解は正確かどうかは、議論評価の本当の問題になる。
- (3) Sedley, p.8.
- (4) Sedley, pp.62-86.
- (5) McPherran, *op. cit.* pp.84-93. なおセドレーもマックフェランもかつての「統一体系派」のようにイデア論を一般に示唆する言葉を脱線中に見いだそうという解釈態度 (cf. e.g. Cornford, p.85, n.1; p.86, n.1) とは異なり、議論の趣旨の読解から特定重大論点の継続性を見ようとしている。
- (6) Burnyeat, p.34. バーニエットの「レトリック」には、「劣った言説というニュアンスがあるかもしれない。そのようなニュアンスは、そのような言説に頼ったソフィストや弁論家へのプラトンの嫌悪に由来する。わたしはこの言葉をより中立的に用いる」。
- (7) Burnyeat, p.33; cf. Barker, pp.461f.; Polansky, p.135.

- (8) 後の177DA, 5では類義の *ophelimos* が使用され、*agathos* 「よ、善」と自由に交換されている。
- (9) 原語は *agathos* の変化形 (166D7)。直後の167B2で類義の *chrestos* にも置き換えられる。
- (10) 渡辺 (2004) 注18 (225-6頁) 参照。われわれの日常的意識において、風が寒いという人と寒くないという人が「対等なあらわれ」を持つというケースは、少数のボールド、ライ、イン、ケースであるという了解が通常背景にあつて、それで「ローカルな相対性」を承認しているように思える。このかぎりでの事態は、私見では、相対主義には味方せず、客観的真理へのわれわれの先行的で一般的な荷担を、むしろ示唆する。
- (11) Burnyeat, pp.33f.
- (12) 現在形では、プロタゴラスの相対真理論に何らの修正も加えないことが、「演説」の精神を尊重していることの最大の証拠である。私見では現在形でも、プロタゴラスの相対主義が維持できないことは、第一部最終議論 (38B-186E) のテアイテトス流「知覚知識説」崩壊の場面にいたって初めて、結論となる。(ただし現在形のみが、相対主義の領土になるということ自体、すでに事実上の全面敗北に近い事態であるので、やはり「脱線議論」の効力は抜群であるとわたしは解釈する。後の二二頁参照。) この点に関し後注16も参照された。
- (13) Chappell, p.131. ただしチャペルは、この批判への「脱線議論」の本質的貢献を見逃しているように思われる。
- (14) 話の焦点はソクラテス裁判における、敗訴、刑死にいたったソクラテスの一見たいへん拙劣な弁論にある(この「拙劣さ」の評価に関し、渡辺 (2012c) 参照)。『テアイテトス』は対話の設定としては、裁判を起こされたソクラテスがバシレウスという役所に向く直前という日時設定になっている (210D)。
- (15) 「脱線議論」における標的としての大衆の考えとプロタゴラスの立場の区別を強調する解釈として、Labriola 参照。
- (16) この視点から、「価値相対主義」をそれとして争点とすること、そして先に引用した12Bの正義、不正、敬虔、不敬虔に関する相対主義をストレートに批判することは、不可能ではない。しかしソクラテスとテオドロスはここの議論や直後の議論ではそのオプションを選ばず、「現在形における相対主義の全面成立」を相手のプロタゴラスに認めた上でのより慎重な議論にしている。
- (17) Cf. *Gorgias* 470E1f.
- (18) 161B, 162A, 164E-165A, 179D-180C.

- (19) 『メノン』に関しては渡辺 (2002a) の「解説」を参照されたい。
- (20) 美や正義に比べ善が国家の明日の担い手の最大の学習事項となることのわかりやすい徴候は、人々が善と思われることでは満足できず「現に善くある」ことを求めており、それゆえ善をめぐる争いが絶望的に激しくなることにあととされるから (『国家』VI, 502C-506B)。<sup>1)</sup> 理論的認識のグレードの単純な差のなかで「一番優秀なもの」を理論として抜き書きすることは、プラトンはそもそも意味をなさない。
- (21) 「本人状況」と「第三者状況」という言葉は、むかしわたしが聴講した政治学の入門講義で京極純一氏が〈政治というもの〉の始まりを説明するために使ったものである。〈倫理というもの〉も、このような何らかの区別を立てた話の中でないと、説明も理解もされないように思われる。政治学や、一般に行動に関係する人文科学と社会科学において人のふるまいや態度を語る際、明らかに有効な区別であり、しかもこのネーミングのもとで特別な予備的説明を要しないものであると考える。なお、プラトンが戯曲で哲学的内容を表現したことは、このような事柄への「入門」のためにも有効なことであつたと思われる。
- (22) このせりふの詳しい解釈は渡辺 (2006) 11頁に記した。
- (23) 渡辺 (2006) 10-11頁。
- (24) 渡辺 (2006) 5-13頁参照。
- (25) ただし『ソフィスト』は実質的に『テアイテトス』の継続議論であり、そこでの相対主義・プロタゴラスの主張の徹底的議論が残っている。『テアイテトス』第二部のドクサの議論では虚偽不可能論のパラドクスが問題にわれ (187DE)、結局解決されない。これに類似のパラドクスは『ソフィスト』でプロタゴラスなしソフィストの名と結び付けられて導入され (216E-241B)、<sup>2)</sup> 解決をみると主張されるから、結局プロタゴラスの主張は、これら二つの対話篇全体で、究極的な論敵であり続けたとも言えるだろう。
- (26) Burnyeat, p.246.
- (27) ただし、この議論のどこにおいても、立法に関する専門知が存在するという断言をプラトンは慎重に避けている。そのような知恵を売り物にしたいソフィストに余計な譲歩をしていないと同時に、そのような専門知が事実的に確立されていないことの誠実な容認でもあると思われる。
- (28) このように考えてゆくと、議論B時点での未来時制における知と不知の絶対的な差の存在と知識に関わる諸権威の存在の容認は、議論の表層で「現在時制における、真理にかかわる相対主義」を手つかずのまま保存しているとはいえず、深層

『テハイテトス』の「脱線議論」(172C-177C)の意義と内容について

- では、知覚に関わる真理述語の問題としての「相対主義」にとつて、すでにほんとうの脅威であることになつていように、わたしには思われる。或る人が、風が吹いたとき寒いと感じ、或る別の人はそのときそのおなじ風が寒くないと感じたとき。これは、典型的な相反するあらわれの現象であり、完全に主観的な真理しか語れない種類の事例であるとも思われるだろう。だが、われわれの実生活において、このように記述される或る時或る場所での事態がどのように豊かで多彩なニュアンスにあふれているか、反省的に考えてみることもできると思われる。出身地や個人の特質体質の問題がなければ、われわれはその寒いと感じる人が病気ではないかと考えたり、他のいろいろな「気遣い」をしたりするだろう。逆に寒くないと感じる人の発話の意味をいろいろ詮索したりするかもしれない。現実のやりとりで、主観的事実の客観性は微細な事実の区別と微細な対応の仕方において、「主観性を持つ客観性の諸事態」とでも呼ぶべき事実分類に応じた「対応のバリエーション」を持つている。このようなバリエーションの豊かさを文化の中で身につけることによりわれわれは「それなりの大人」になり、さらにそこからいつそう成熟していくように思われるし、その豊かさや結果としての行動の適切さのところに、日本語で言えば「気づき」や「気配り」や「気の働き方」、古典ギリシア語ふうに言えば「知」や「賢さ」の程度差をみる事が可能になるように思われる。そして、学問以前にも観察される、優劣の差をもつこのような対応力の幅の事実が、それを強化するような人間における「学問」の意義に、つながっていると思われる。
- (29) Burnyeat, pp.40f. に、プロタゴラスからの可能な反論の検討 (cf. Chappell, pp.131f.) がある。問題そのものは非常に興味深いが、これは「自我の通時的同一性」という純理論的問題意識からのパズルであり、本稿の解釈方針とは異なる解釈方針に発するもので、ここでは取り上げない。
- (30) 本稿は平成25年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「知の実践性と道徳性に基づく幸福論の研究」による研究成果の一部である。